



お金の地産地消を考える (前編)

— 『エンデの遺言』 から読み解く —

小樽商科大学ビジネス創造センター学術研究員

宮崎 義久



今年ドイツの児童文学作家ミヒャエル・エンデ (Michael Ende, 1929-1995) が没後20年を迎えた年である。彼の著書は日本人にとって非常に馴染み深いものであり、代表作『モモ』(1973)をはじめとして、様々な作品が親しまれている。そのエンデが最後に残したメッセージをもとに制作された「エンデの遺言—根源からお金を問うこと」(NHK-BS放送1999年5月4日放映)は非常に示唆に富む内容であり、私たちが普段何気なく利用しているお金の本質を考えるきっかけを与えてくれる。ここではエンデの思索を振り返りながら、小樽のような地方都市におけるお金の役割について考えてみたい。

エンデは、現代社会がお金の病(やまい)にかかっており、それがアルゼンチンやアジアにおける通貨・金融危機をはじめとする世界的な金融不安の原因であると指摘し、次のように主張している。「どう考えてもおかしいのは資本主義体制下の金融システムではないでしょうか。人間が生きていくことのすべて、つまり個人の価値観から世界像まで、経済活動と結びつかないものはありません。問題の根源はお金にあるのです。」

さらにエンデは、お金の捉え方について、「重要なポイントは、パン屋でパンを買う購入代金としてのお金と、株式取引所で扱われる資本としてのお金は、二つの異なる種類のお金であるという認識です」と述べている。そもそもお金には、いくつかの異なる役割が備わっており、それらが矛盾することで様々な問題を引き起こす要因になると考えていた。

そのうえでエンデは、「お金のしくみは人間がつくりだしたものなのだから、変革もできるはずであり、同時に過去のさまざまな試みのなかに未来へのヒントがある」と述べている。その際に紹介したドイツの経済思想家シルビオ・ゲゼル (Silvio Gesell, 1862-1930) は独自なお金を発行することによって社会の変革を行うことを提唱

した。彼が提案した「自由貨幣(減価するお金)」は、時間とともにお金の価値を目減りさせて、お金の流通速度を高め、不況や失業を解決しようというアイデアであった。独自なお金を発行するという試みは、現代の地域通貨の実践的な取り組みにも深い影響を及ぼしている。

私たちは、エンデやゲゼルの思索から何を学び、現代社会にどのような教訓を導き出すことができるのだろうか。第一に、お金がモノやサービスと交換するための手段であることを再認識しなければならない。そもそも、お金は、資産・財産として価値を貯蔵するための手段でもあることから、生産や消費などの経済活動とは切り離されたところで蓄積されてしまい、地域経済が疲弊する懸念材料となる恐れがある。このような問題を避けるためには、お金の役割を交換機能に特化するか、あるいは交換機能を促進させるような何らかの工夫が必要である。

第二に、お金の循環について、地域独自の発想が求められている。まちの経済を考えたとき、モノ・サービスの流れだけでなく、お金の流れについても注視することが、地域の実態を把握するうえで重要になる。さらに、地域の人々が自ら稼いだお金または融資されたお金を地域内で循環的に利用することによって、お金やモノ・サービスなどの取引の流れが域外に流出することを抑制し、域内における経済活動の活性化を図ることにもつながる。このことから、お金の地産地消を可能とするようなしくみづくりが地域の持続的な発展に寄与すると考えられる。

近年小樽市内においても、地域内の資金循環を促進するための多様な取り組みが誕生している。例えば、ふるさと納税、プレミアム商品券、クラウドファンディング、地域通貨などが挙げられる。域内の資金循環を促すことを目的とした試みが地域社会にもたらす影響を精査することが今後の課題となるだろう。